

探究学習、新学習指導要領 変化する高校教育に対する教員の現状

高校教育改革に関する調査2022 結果報告

リクルート進学総研では22回目となる「高校教育改革に関する調査」を昨年8月に実施した。本稿では22年度1年生から実施の「新学習指導要領」への対応について調査結果をもとに現状や課題を報告する。

調査対象: 全国の全日制高等学校4721校

調査方法: 郵送調査+インターネット調査
※校長・進路指導室に調査票を郵送、回答を記入のうえ郵送または記載のURLからインターネット調査に回答

調査期間: 2022年8月4日(木)～9月9日(金)

有効回答数: 943校(回収率20.0%)
注) 前回調査は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)影響により当初予定2020年を2021年に変更し実施。また、2016年(第19回)までは高校の進路指導やキャリア教育の実態を明らかにするため「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」として実施。

【回答者プロフィール】

●設置者別
国公立676校(71.7%) 私立267校(28.3%)

●高校タイプ別
普通科単独校535校(56.7%) 普通科と他学科併設223校(23.6%) 総合学科60校(6.4%) 専門学科109校(11.6%) その他12校(1.3%) 無回答4校(0.4%)

●地域区分
北海道75校(8.0%) 東北100校(10.6%) 北関東・甲

信越110校(11.7%) 南関東164校(17.4%) 東海130校(13.8%) 北陸23校(2.4%) 関西99校(10.5%) 中国・四国110校(11.7%) 九州・沖縄132校(14.0%)

●校務分掌別(※複数部署による回答校あり)
校長3校(0.3%) 副校長・教頭25校(2.7%) 主幹教諭46校(4.9%) 教務主任25校(2.7%) 進路指導主事758校(80.4%) 学年主任12校(1.3%) 進路指導部157校(16.6%) 教務部9校(1.0%) 学年担当38校(4.0%) その他25校(2.7%) 無回答2校(0.2%)
※小数点以下第二位を四捨五入

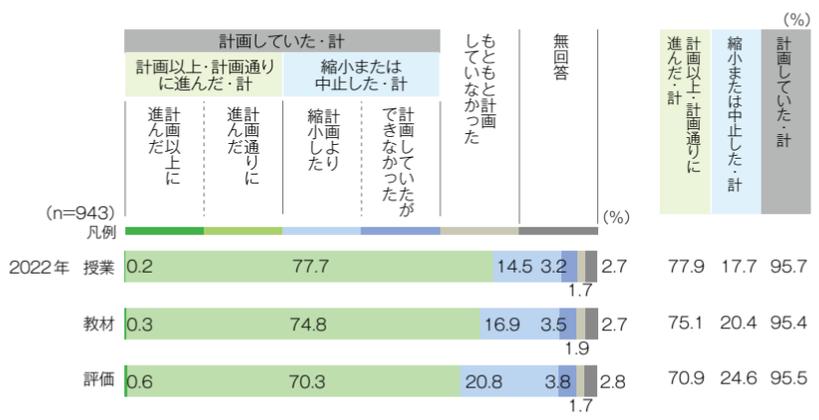
新学習指導要領への対応の進捗

2022年度実施に向けて順調に進捗したが、新しい評価への対応や「情報」への取り組みに課題

コロナ禍や入学者選抜改革への対応が山積する中で2022年度より学年進行で実施の「新学習指導要領」への対応は概ね順調に進捗した(図表1)。カテゴリ別に「計画以上・計画通りに進んだ」割合を見ると、最も高いのは【授業】。最も低いのは【評価】で25%が「縮小または中止した」と回答。3年間の移行期間を経てはいたが、新しい3つの観点別評価は導入に苦戦する高校もあったようだ。

取り組みにあたり課題のある教科を3つまで選んでもらったところ(図表2)、「情報」が46%と突出して高い。

図表1 新学習指導要領への対応の進捗度(全体/各単一回答)
計画通り以上に進捗は7割超。【評価】は25%が計画縮小・中止



図表2 「新学習指導要領」の取り組みにあたり課題のある教科(全体/3つまでの複数回答)
「情報」が突出。必修科目が新設された教科が上位に

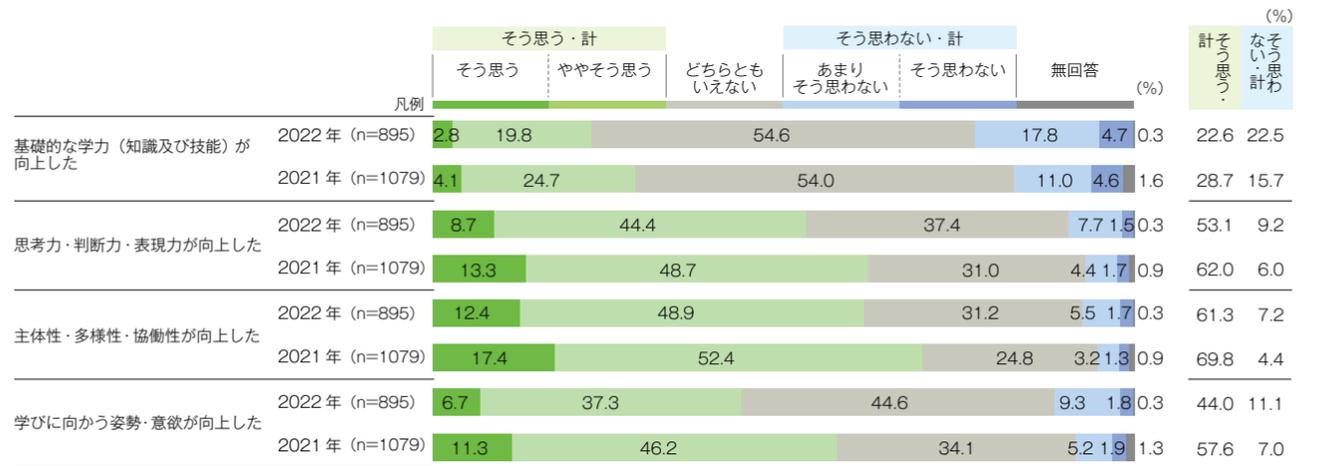
順位	教科名	1～3番目合計 (%)
1位	情報	46.3
2位	地理歴史	37.2
3位	国語	32.7
4位	数学	25.3
5位	外国語(英語)	23.2

総合的な探究の時間

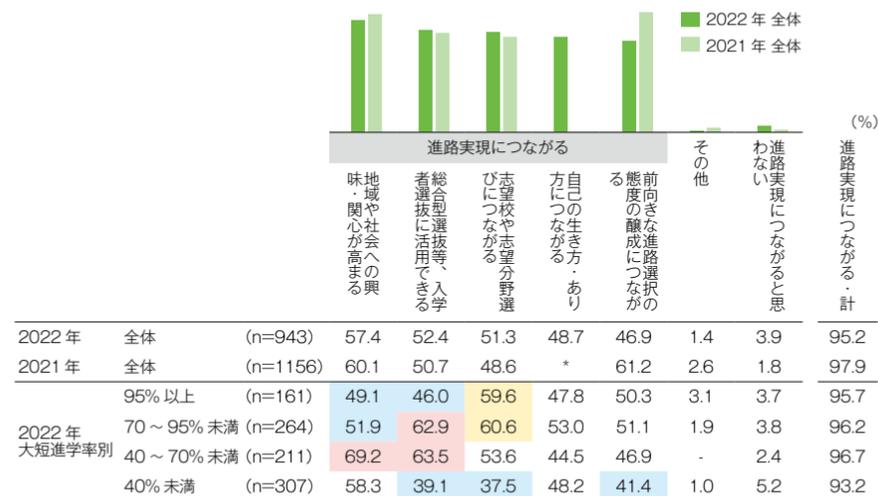
効果が実感され進路実現にもつながる取り組みだが、課題は効果の二極化と教員の負担

新学習指導要領の要となる「総合的な探究の時間」の取り組み校(全体の95%)に、4つの力を提示して取り組みによる生徒の変化を尋ねた(図表3)。変化(向上)を感じている割合は【主体性・多様性・協働性】【思考力・判断力・表現力】が高く、向上が実感されている。一方、【基礎的な学力(知識及び技能)】は向上を感じている割合とそう思わない割合が共に23%と拮抗する結果となった。前回比ではいずれの項目も「そう思う・計」が低下。【主体性・多様性・協働性】【思考力・判断力・表現力】【学びに向かう姿勢】は「どちらともいえない」の増加が大きい。フリーコメント①からは、「まだ結果が見えていない」というだけでなく、生徒・教員共

図表3 「総合的な探究の時間」への取り組みによる生徒の変化(「総合的な探究の時間」導入校/各単一回答)
【主体性・多様性・協働性の向上】を6割が実感



図表4 「探究活動」の生徒の進路選択へのつながりについての考え(全体/複数回答)
進学率70%以上群では「志望校選択」、中位校では「入学者選抜活用」



フリーコメント①
探究で感じる具体的な生徒・教員の変化

- 探究活動での学びの経験から自己のキャリア形成を考えるようになっていく [東京都/都立/普通科]
- 生徒が発表に対する抵抗感が小さくなった。成果を言語化する能力が向上した [兵庫県/県立/普通科と他学科併設]
- 主体性の向上を期待したが、結局やられていることに変わりなく、以前よりより受動的になっている感じがする [静岡県/県立/普通科]
- 全体計画を立てて取り組んでいるが、教員の意識・力量に差があり計画通りに進んでおらず、まだ結果が見えていない [青森県/県立/総合学科]

積極的な群と「やらされ感」で受動的な群に分かれている様子もうかがわれ、効果が二極化している状況が生まれているようだ。

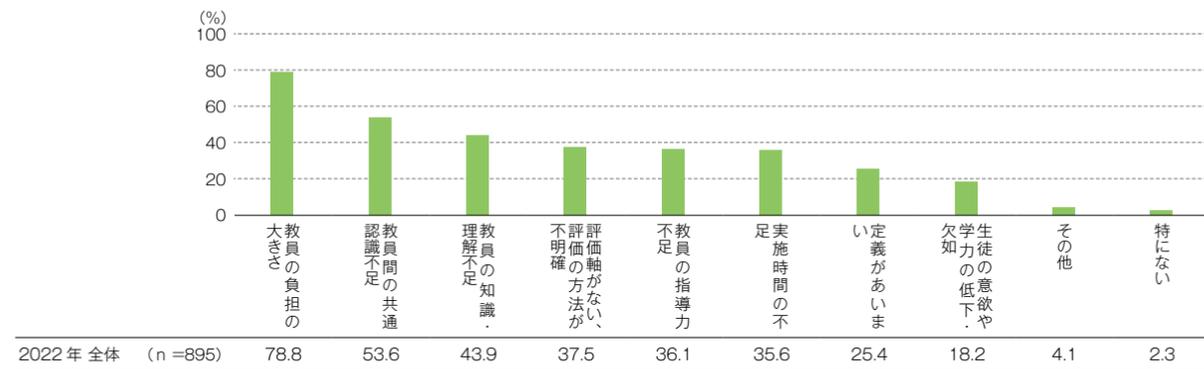
では探究活動は、生徒の進路選択にどのようにつながっているのか(図表4)。95%が「進路実現につながる」と感じており、今回提示した選択肢のスコアは全て4割以上で多くの影響があると感じられている。大学・短期大学進学率別に比較すると特徴が見られ、進学率70%以上の群では「志望校や志望分野選びにつながる」が高い。「総

合型選抜等、入学者選抜に活用できる」は進学率40~95%未満の高校で高く、活用方法の違いはあれども、進路選択への直接の影響が強く想定されている。40~70%未満の群では「地域や社会への興味・関心が高まる」が高く、地元への貢献意欲や就職につながる事が想定されている。

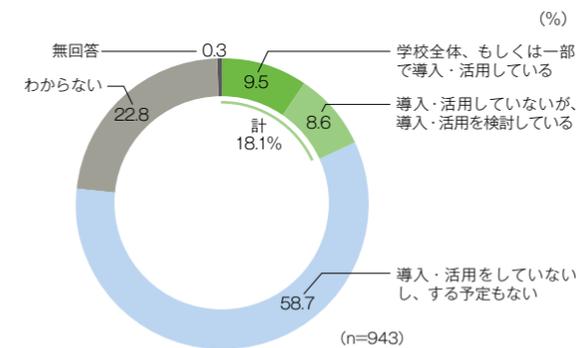
探究活動に取り組むにあたっての課題(図表5)では、1位の「教員の負担の大きさ」が突出して高く導入校の79%が課題に挙げる。2位以下も教員に関する課題が上位を占める。

高等教育に続き初等教育での導入も検討されているアントレプレナーシップ教育についても尋ねたが、現時点では導入する予定がない高校が多数で「導入・活用している/検討している」は18%。フリーコメント②では高校教育で取り組む必要性を疑問視する声が多い。探究学習に重なる、課題解決に向けた姿勢や思考を育む教育として動向が注視されるが、現時点では時期尚早と捉える向きが多いようだ。

図表5 「総合的な探究の時間」に取り組むにあたっての課題(「総合的な探究の時間」導入校/複数回答)
1位「教員負担の大きさ」が79%で突出。2位以下も教員の課題が上位



図表6 「アントレプレナーシップ(起業家精神)教育」の導入・活用状況(全体/単一回答)
「導入・活用している」「検討している」計18%。
現時点では多数が予定なし



フリーコメント②

「アントレプレナーシップ教育」の導入に取り組むにあたっての課題や不安

- 全高校生に必要な素養だとは思えない【埼玉県/県立/普通科】
- 専門的な知見を持つ人材が少なく、指導に苦戦している【福岡県/市立/総合学科】
- 基礎的な知識や技能の向上が最優先課題と考えている。知るからこそ面白みが理解でき、そこから創造が広がり、アントレプレナーシップにつながると考える【神奈川県/県立/普通科】
- 関心はあるものの、探究活動やICTの導入等、優先度の高い他の教育活動で精一杯の感がある。教員の働き方改革も叫ばれる現在、さらなる教育活動の拡大には慎重にならざるをえない【島根県/県立/普通科と他学科併設】
- 探究学習が深化してくると、自然発生的にアントレプレナーシップ教育が必要になってくると思うが、今はその段階ではない【福島県/私立/普通科と他学科併設】

社会で働くにあたって必要とされる力/現在持っている力

必要とされる力は「課題発見力」が過去最高スコア。「チームで働く力」が徐々に伸長

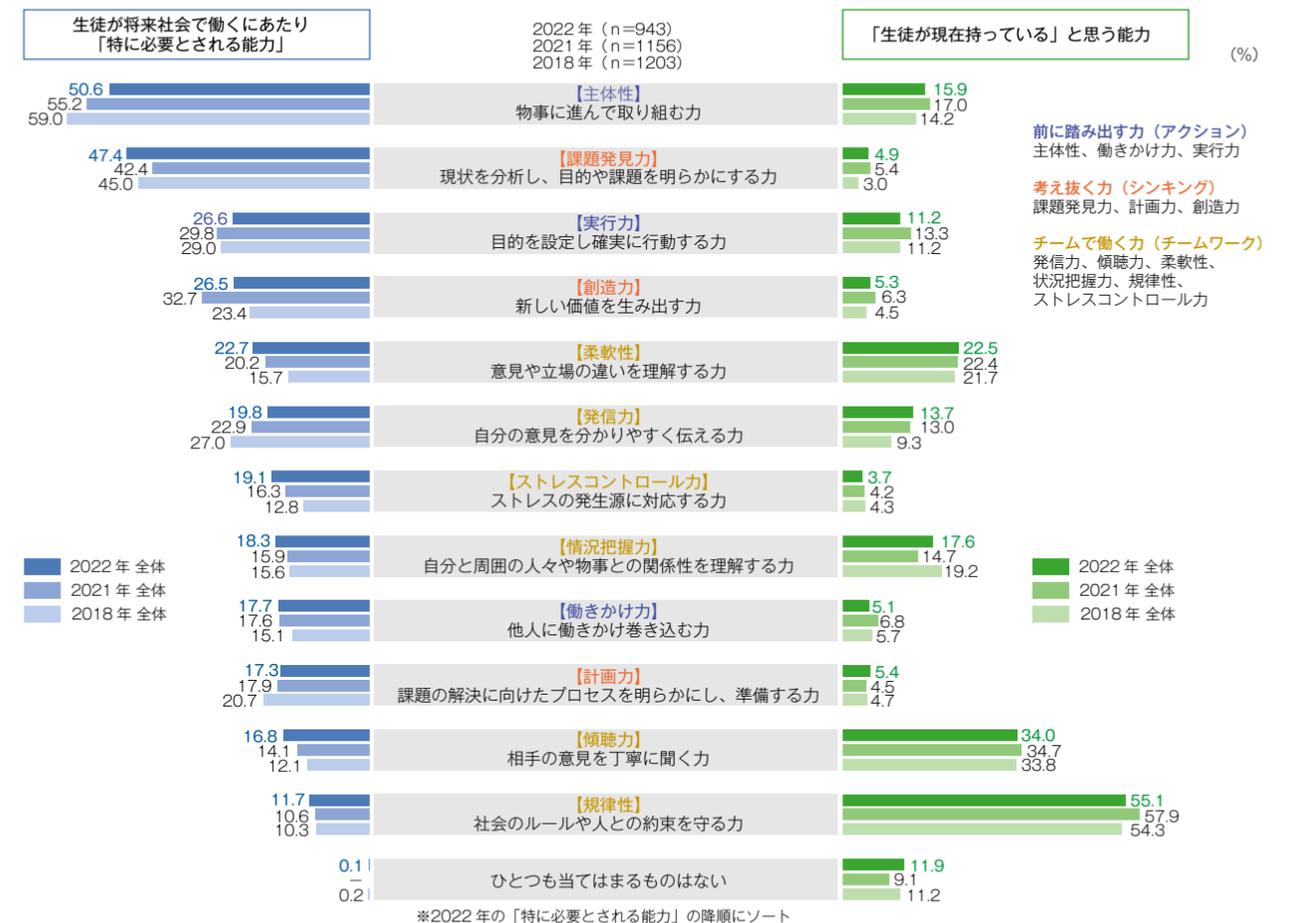
新学習指導要領で育成を目指す能力について、経済産業省定義の「社会人基礎力」を提示した設問で教員の認識を見た(図表7)。**【特に必要とされる能力】**の上位の顔ぶれは変わらないが、前回比では、トップの「主体性」が低下した一方、「課題発見力」が伸び、調査開始以来最高のスコアとなった。また、順位は上位ではないものの

「チームで働く力」の多くのスコア(「柔軟性」「ストレスコントロール力」「状況把握力」「傾聴力」「規律性」)が前回比で伸びている。日々の教育活動の中で、教員が多様性の進む社会を意識しつつあるように思われる。

【生徒が現在持っていると思う能力】も上位の顔ぶれに変化はない。なお、順位は中位だが2021年にスコア

を伸ばした「発信力」が2022年もスコアを維持。近年の「主体的・対話的深い学び(アクティブ・ラーニング)」の取り組みの影響が考えられ、前述のフリーコメント①の「成果を言語化する能力が向上した」に代表されるように、発表や対話の機会が増えたことで生徒の変化を感じている教員もいるようだ。

図表7 社会で働くにあたって【特に必要とされる能力】と【生徒が現在持っていると思う能力】(全体/各3つまでの複数回答)
必要な力のTOP2は「主体性」「課題発見力」。持っている力1位は「規律性」



高校進路指導の課題

「新学習指導要領」の取り組みやコロナ禍対応で指導時間不足か。「入学者選抜の多様化」も大きく増加

ここでは「進路指導上の課題」を見ていく。1位【学校】「教員が進路指導を行うための時間の不足」、2位【進路環境】「入学者選抜の多様化」、3位【生徒】「進路選択・決定能力の不足」、4位【生徒】「学力低下」、5位【生徒】「職業観・勤労観の未発達」と上位の顔ぶれに大きな変化はないが、いずれもスコアは前回と同率あるいは上昇。「教員が進路指導を行うための時間の不足」「入学者選抜の多様化」は特に大きく増加している。

逆に前回比で大きく減っているのは、【進路環境】「産業・労働・雇用環境の変化」「高卒就職市場の変化」。コロナ禍での急激な雇用環境の変化を経て落ち着いた就職指導は、困難さが軽減されている。

2018年からの経年比較では【進路環境】「仕事や働くことに対する価値観の変化」、【生徒】「職業観・勤労観の未発達」が増加し続けており、職業観を育む指導の難しさは年々増している。また【保護者】「保護者が干渉しすぎる」「進路環境変化への認識不足」も経年で伸び続けており、生徒、保護者の価値観の変化への対応が課題となっている。

受け入れる大学側は、「進路指導時間不足」「進路選択・決定能力の不足」に伴う入学後のミスマッチによる退学防止、「学力低下」への初年次教育、職業観の未発達へのキャリア教育の対応等が影響する課題として考えられる。

図表8 進路指導上の課題(全体/複数回答)
「教員の時間不足」「入試の多様化」「生徒の決定能力不足」が上位



大学・短期大学への期待

1位「就職実績の公開」が過去最高スコア。「基礎学力を問う入試の拡大」が5位に躍進

最後に「大学・短期大学に期待すること」を見ていこう。1位は「就職実績の公開」で、前回からスコアがやや上昇し調査開始依頼最高のスコアとなった。

2位の「実際の講義・研究に高校生が触れる機会の増加」も前回に引き続き期待が高い。高校の指導として、94%が進路検討においてオープンキャンパス参加を推奨している(図表10)。3位「分かりやすい学部・学科名称」、4位「卒業時に身につく能力の明確化」も含め、生徒の希望進路とのミスマッチを防ぎたい教員の意向を反映する項目が上位を占める。

前回比で見ると5位「基礎学力を問う入試の拡大(知識・技能)」がスコアを大きく伸ばした。前述の進路指導の課題の上位にある「学力低下」の要因とも関連し、推薦入試枠が拡大する中で学習意欲が低い生徒のモチベーションを上げたい高校教員の期待が大きいと思われる。また「入試の種類の抑制」も10ポイント近くスコアを伸ばした。こちらも進路指導の課題上位項目「入学者選抜の多様化」に対応しており、入試に関する高校現場の切実な声として受け止める必要があるだろう。(文/編集部)

図表9 大学・短期大学に期待すること(全体/複数回答)
「就職実績の公開」「講義・研究に高校生が触れる機会増」が2大要望



※カテゴリーごとに全体値の降順にソート ※「*」は該当の項目なし

図表10 進路検討における「オープンキャンパス」参加の推奨度と(全体/単一回答)
6割が「強く推奨」し、「推奨している・計」は94%を占める

